

マー、インドを結ぶ大容量光海底ケーブル「MIST」の建設を発表した。同ケーブルは総延長11,000km、240Tbpsの伝送容量を有し、東南アジア地域において電気通信事業者から独立した初の海底ケーブルとして注目された。キャリアフリーなデータセンターと大容量光ファイバーで各陸揚局を接続することで、エンドツーエンドのネットワークサービスを提供するとともに、全陸揚局を中央で保守する体制を整え、サービス品質の向上を図っている。

また、2021年8月には Chunghwa Telecom、PLDT、Facebook、Google とのコンソーシアムを設立し、全長約12,000km、190Tbps超の大容量光海底ケーブル「APRICOT」の建設・保守に着手した。日本・シンガポール間のルートに加え、分岐装置を活用してインドネシア、フィリピン、台湾、米国との接続を実現することで、既存のASE、APG、PC-1、JUPITER、さらには建設中のMISTと組み合わせ、複数ルートによる冗長構成を確立。これにより、日本近海で発生し得る自然災害などの不測の事態に対しても、迅速な遠隔操作による伝送ルートの変更でユーザーのビジネス継続性が確保される仕組みを整えた。

さらに、2022年7月、NTT Ltd.グループのNTTリミテッド・ジャパン、PC Landing Corp.、三井物産、JA三井リースの4社は、最新のSpace Division Multiplexing (SDM) 技術を採用した日米間大容量海底通信ケーブル「JUNO」の建設・運営を担うセレンジユネットワーク株式会社を設立した。ケーブル1本当たりの光ファイバー収容数を従来の16ファイバーペアから20ファイバーペアへと拡張することで、総通信容量350Tbpsを実現し、日本陸揚局2拠点から米国への多重ルートの確保によって高い対障害性も維持できる設計とした。あわせて、JUPITERやMIST、

APRICOT同様、WSS機能を用いた柔軟な伝送制御も可能とした(図表3-5-1)。

これらの一連の取り組みは、NTTコミュニケーションズ及びNTT Ltd.が、単なる大容量通信インフラの提供にとどまらず、最新技術の積極的導入と各地域の地理的条件や自然災害によるリスクへの対応を通じ、信頼性と柔軟性を兼ね備えたネットワーク基盤の構築を進めていることを如実に示している。各プロジェクトは、日米、アジア、欧州の多様な通信需要に応えるための基盤として、更なる発展が期待されている。

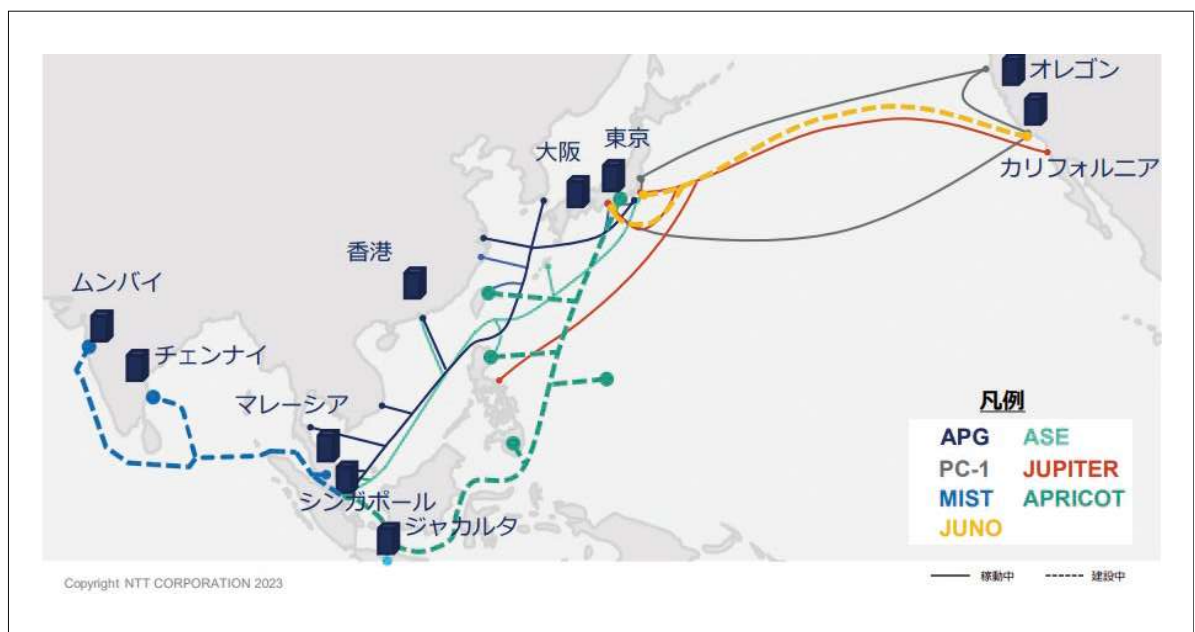
5-2. クラウドサービス基盤の獲得・強化

(1) クラウドサービスの起源

NTTグループのグローバル事業において、クラウドサービスは中核として位置付けられるが、その起源は1998年4月に米国の有力ISPであるVerio社へ11億ドル(出資比率12.5%)を出資して経営に参画し、各種IPサービスの共同展開などを通じた業務提携を開始したことに遡る。この提携は、NTTグループが海外で展開する「グローバルIP事業」の高度化・拡充を目的としたものであった。同年10月には、NTTアメリカが「アークスターインターネット」の名称で企業向けインターネット接続サービスを開始し、Verio社の大容量ネットワークを活用して全米200カ所にアクセスポイントを設置、日系企業等へのサービス提供に乗り出した。

(2) Verio完全買収によるTier1プロバイダー化

図表3-5-1 ▶ NTTの主要国際海底ケーブル



出所：NTT「データセンターの成長戦略 IR DAY 2023」(2023年10月3日)